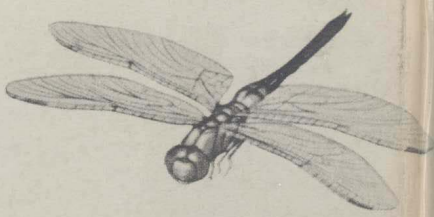

盲滅法

深沢七郎対談集

対談集　盲滅法（めくらめつぽう）

一九七一年一一月一五日第一刷
著者代表＝深沢七郎
装幀・レイアウト＝横尾忠則
発行者＝竹内　達
発行所＝株式会社創樹社
東京都文京区本郷二―一五―二一　郵便番号一一三
電話東京八一五―三三三一（代表）　振替東京一五四五八〇
印刷＝萩原印刷（本文）
印刷＝錦印刷（装本）
製本＝今泉誠文社
定価八七〇円
©深沢七郎　一九七一　Shichiro Fukazawa
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

盲滅法（めくらめっぽう）

深沢七郎対談集

創樹社

盲滅法（めくらめっぽう）・深沢七郎対談集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

I

自然と文学　（井伏鱒二・深沢七郎）――――15
農業と病気　甲州人の気質　桃の美しさ　正宗白鳥のことなど　『武州鉢形城』のヤニ松　秀吉と信長　イタチ・テン・ミンク　吸血虫について　シャクシ菜・広島菜その他　古墳と耕地整理

秋の夜譚　（木山捷平・深沢七郎）――――49
教養のある人は肩が張る　小説の注文はへんな気持　楢山節の顔をしろ　空腹では書けない　結婚しない決心　ポン引きをしたこともある

「思想のない小説」論議　（大江健三郎・深沢七郎）――65
庶民ストリップ烈伝　だじゃれムード烈伝　こじきプレ

スリー烈伝　たましい消滅烈伝

ギター・軽演劇・文学・自殺　（深沢七郎・古山高麗雄）――75
深沢七郎自伝・若いころ　主義でない嫌戦　戦争中に書いた小説　日劇ミュージックホールにはいったいきさつ　オペラ館・ムーランルージュ　しまいが先の小説作法　自殺は自然淘汰である　深沢文学の伴奏音楽　理解より勘できめる　編集者になってみたい

私の文学を語る　（深沢七郎・秋山駿）――105
ごだめ百姓　猿飛佐助から椿姫へ　おばあさん好き　大宰治・歌　ギターと小説　八月十五日　商人の道・身の快楽　だんだんおばあさんみたいに……

II

やっぱり似たもの同士　（山下清・深沢七郎）――137
どうやって捨てるのかな？　ヘビはこわいな　女は年を取るのをいやがるな

赤帽今昔譚　（米山耕蔵・深沢七郎）――151

赤帽の先輩後輩　忘れえぬ人々　当世お客気質　赤帽今昔

人間・動物一代説　（古賀忠道・深沢七郎）――161
動物園と上野　動物と戦争　鶴の生活　鹿の生活　姨捨子捨

楢山を越えて　（深沢七郎・木下恵介）――171
どぎつい美しさ　ヌードは富士山より美しい　死ぬのは商売　七郎さん楢山へつれてって　のたうちまわって書きあげる　問題作というもの　土のにおいの文学

III

生活と表現　（深沢七郎・白石かずこ）――189
ものを書く人　徹底したホステスのよさ　踊りのような小説　友達は花のようなもの　やりたいことをやる　人間を減らしたい

ウジムシと大神さま　（北村サヨ・深沢七郎）――217
六人目の女房　ウジならまだいいよ　聞いてお帰り荷物

にゃならん　平凡の中の非凡？

お女郎の芸とシラバ　（下谷峰吉・深沢七郎）――229
芸者七十五歳の現役　明治は遠く　文明開化のおもしろさ　下谷の古狸・楢山の子狸

芸の世界と百姓志願　（坂本スミ子・深沢七郎）――237
ビートルズ台風　現代ファン気質　おばけがこわい　舞台と田んぼ

Ⅳ

女はみんなビフテキだ！　（深沢七郎・殿山泰司）――253
食べたいときに女を食べる　多情は精神的独身である　どんどん離婚すればいい　目が覚めて見る裸は美しい　おばあさんもエロ映画で奮起する　どんないい女にも飽きがくる　好きな女ときらいな女と　面倒くさいが必要なもの

味噌とギターと御詠歌と　（深沢七郎・野坂昭如）――269
味噌屋から今川焼屋へ？　山梨のギター・ボーイ　ベー

トーベンは悪魔の音楽「歌う直木賞作家、来る！」百姓マゾ論　公害は淘汰する

当代うんこ談義（野坂昭如・深沢七郎）――285
男は二重奏・女は四重奏　深沢梅林に百姓文化財　希望は肝臓ガンで死ぬこと　インテリはインチキ性欲・労働者は本能的性欲

テレビせんずり論（深沢七郎・矢崎泰久）――301
テレビは睡眠薬　ＮＥＴ事件の真相　お仕着せＮＨＫコマーシャルは楽し　人間滅亡教徒として

しょんべん対談（深沢七郎・竹中労）――315
連れションの仲　ションベンの技巧と技術　排泄は神聖な行為　処女のお小水は不老長寿の薬?!

糞尿屁座談会（永六輔・竹中労・野坂昭如・深沢七郎司会＝矢崎泰久）――327
放屁合戦　痰壺の神様　臭殺法　血便の美学　湯槽中の快　オナラ節、題して「ケムリ歌」

V

瞽女(ごぜ)門付唄抄　（森田スギ・深沢七郎）――――345

文久銭十五文の流し時代　〝おヘソの下にも料理屋がござる…　一日十里の道のり　別段、面白かったこと無し　米粒を勘定して食べた時代　動けるうちはやっておこうと思って…

申しわけないこと　あとがきにかえて――――355

対談者略歴――――（各対談者写真裏）

装幀　横尾忠則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

表の写真は深沢七郎氏近影　撮影　大木　敏

井伏鱒二氏

一九六九年六月　文芸

●対談者略歴

井伏鱒二（いぶせ・ますじ　一八九八―　）
本名満寿二。広島出身。早大仏文中退。小説家。庶民的なペーソスの中に、ユーモアをまじえた独自の作風で知られる。初期の「屋根の上のサワン」「山椒魚」から『丹下氏邸』『さざなみ軍記』等をへて、『ジョン万次郎漂流記』（昭十三）で直木賞受賞。戦後は『本日休診』（読売文学賞）『黒い雨』等多数のほか『厄除け詩集』（昭十二）一巻がある。『井伏鱒二全集』（全十二巻）はその集大成である。

撮影　立花義臣

●自然と文学

井伏鱒二・深沢七郎

農業と病気

深沢　こんなところ（埼玉県菖蒲町）までわざわざお越し頂きましてどうも。

井伏　ラブミー農場を、一度見たいと思っていました。病気のほうはもういいんですか。

深沢　ええ。お蔭様でどうにか。

井伏　狭心症ですって？　いつからですか。

深沢　私が東京からここに来る前に、血圧がうんと高かったのですね、それでいつポックリゆくかわからない。二日でも三日でも百姓をしたいと思ってここに来たら、二日や三日はすぐたっちゃって、三年たってしまい、三年やったら狭心症になったんです。なんの未練もなかったけれど、農業だけは未練がありますね。それはなぜかと言いますと、さあこれからやるんだというので、いろいろ覚えて仕度したわけです。農業の機械も使えるようになったし、なにもかもするようになったら狭心症になったでしょう。自分の念願の百姓がやれて、満三年の独立記念日というのをやって、それから三日たったら、狭心症の発作がおきまして、その時に、これはもう農業ができないと思ったですね。あの時は、いま死ぬかと思って、朝まで生きちゃったのですけれども。

井伏　急に出たんですか。

深沢　いや、いま考えれば十年ぐらい前からあったそう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com